

セリグマンの犬

余録

毎日新聞 2013年05月16日

(青太字は引用者によるものです。)

板で二つに分けた部屋の一方に犬を入れて電気ショックを与える。いや半世紀前の実験なので念のため。板を飛び越えればショックを逃れられるのに、一部の犬は動こうとしない。実験をした心理学者の名から「セリグマンの犬」と呼ばれる▲それらは以前に電気ショックを回避できぬ状況下に置かれていた犬で、「何をしてもムダ」と学習してしまったのだ。このように**苦境から逃れる努力もできなくなる心理状態は「学習された無気力」と呼ばれる**ようになる▲この「学習された無気力」は活力を失った企業などの組織文化への批判として用いられることもある。とりわけ深刻なのは、巨大システムを動かす組織の「安全文化」において「何をやっても同じ」という無気力が蔓延（まんえん）する場合である（J・リーズン著「組織事故」）▲さて実に1万個近くもの機器の点検漏れがあったという高速増殖原型炉もんじゅである。原子力規制委員会は、運営元の日本原子力研究開発機構に運転再開準備を当面見合わせるよう命じるという。点検漏れについて「組織の安全文化が劣化している」と断じたのだ▲ナトリウム漏れ事故から15年ぶりの運転再開が3年前、だが直後の機器の炉内落下事故で再び停止に追い込まれていたもんじゅである。昨秋の点検漏れ公表後も、さらに非常用発電機などの点検漏れが発覚していた。まあ安全への無気力を指弾（しだん）されても仕方あるまい▲ただでさえ普通の原子炉よりも取り扱いの難しい高速増殖炉を、安全文化の劣化した組織に委ねるわけにはいかない。巨費を蕩尽（とうじん）し続ける核燃料サイクル開発が陥った「無気力」の袋（ふくろ）小路（こうじ）である。